

## やまぐち子育て福祉総合センター実績報告

### 専門研修

「児童期につながる学力をどう形成するか part II

「幼児期に育む主体的・対話的で深い学びの土台－要領・指針の改定を踏まえて－」

日 時・・・12月3日(土) 14:00～16:00

場 所・・・山口市立山口保育園 2階遊戯室

講 師・・・島根大学教職大学院 教授 肥後功一先生

参加人数・・・100名

#### 講座内容

##### 1. はじめに

□学習指導要領改定から考える「学び」の捉え

高校←中学←小学校教育を貫く「3つの柱」(確かな学力/豊かな心/健やかな体)につなげていくため、幼稚園教育要領改定の中で、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿が明示された。(健康な心と体/自立心/協同性/道徳性・規範意識の芽生え/社会生活との関わり/思考力の芽生え/自然との関わり・生命尊重/数量・図形、文字等への関心・感覚/言葉による伝え合い/豊かな感性と表現)

□保育所保育指針改定でも0～2歳を新たに「学びの芽生え期」と位置づけた

・3歳までに受けた保育の質によって知的能力、言語能力に差!という海外の研究を引用  
※3歳未満児の保育の在り方は、その後の成長や社会性の獲得等にも大きな影響を与えるため、より積極的な位置づけ必要と指摘

□3歳以上の保育では幼稚園教育要領との整合を図り10の姿を念頭に置くよう求めた

□発達の全体性をとらえる視点

「知的な側面」の育ちを乳児の時から流れの中で考え、それを支えている「土台」の部分(=能力の性質)をもっと深いところから規定している部分(=発達の全体性)をきちんと押さえて取り組むことが大切。

※この視点は障がい等で支援が必要な幼児と関わる時にも重要!

◆発達支援目的は「問題となる行動の変容や望ましい行動の形成」ではなく

「子どもの発達の可能性を最大限実現するよう支援すること」である。

※子どもの中にある「今、伸びたがっている力」を見出し、その力を使って世界と交流することを促し、その結果、もって生まれた発達の可能性を、将来に向かってできるかぎり実現できるよう支えていくこと。この目的に照らして、保育目標(今は何をめざすのか)が設定されなければならない。

※子どもの発達の特徴は<全体のバランスとしてとらえる>必要があるが、どうしても遅れているところ、問題があるところだけに目が行き、それがバランスだということが見失われてしまいがち。遅れているところが「問題」で、そうでないところには「問題がない」ということではない。また遅れているとされた項目が、イコール、その子どもの「発達課題」ではない。

□子どもの“伸びたがっている力”をそばで見とれるのは保育者。ここがきちんと言えなくては保育目標は見つからない。保育者は子どもの中の可能性について保育者としての仮説を持つこと。

そのために必要なのは“専門の力”→標準的な発達を一定の幅で捉える目を持つ

※津守真 「乳幼児精神発達診断」

保育目標は、その子どもの伸びようとする力をどうみていくか？どう育てていくか？

## 2. 子どもの育ちを支える二つの自信

・ Being (在ること) の自信・・・変化しない、そのままいい、すごす  
存在することそのものの自信

母性的な支え 一体化による安定 (拘束)

・ Doing (成すこと) の自信・・・変化する、できるようになる、めざす  
新しい知識・技能を身につけることから来る自信

父性的な支え 対象化による安定 (解離)

## 3. 幼児期に育てておくべき学びの土台ーアクティブ・ラーニングの視点を踏まえてー

□次期学習指導要領の柱となる「アクティブ・ラーニング」の3つの視点

・ 深い学び・・・できない、知らない、分からないから知りたい。やればやるほどさらに疑問がわく。そこに向かっていくのが深い学び。(知識・技能)

・ 対話的な学び・・・自分の中に違う自分を生み出す。自分の中で対話する。人と違っていることへの興味 (思考力・判断力・表現力)

・ 主体的な学び・・・自分から身を乗り出して、気のすむまでとことんやってみる。

(学びに向かう力・人間性)

□主体的・対話的で深い学びの土台を育てるには

幼児期の終わりまでに2つの柱が立っていることが大切!

・ 多様な(多面的な)人との出会いを通して 信頼できる関係を築き磨き合う力を育てる

Being=生物としての力と繋がって自己を育てる時は、  
広げる 思いきり自由に 無制限にハメを外す

・ 後伸びする学力を支える 逞しい心身と自由な発想力を育てる

Doing=社会的な枠・型・役の力を借りて自己を育てる時は、  
葛藤的な在り方を鍛える 自己制御

この2つを  
いいバランス  
で育てる

※信頼できる関係を築きあい磨き合う力・・・

子どもたち同士が、どんな人に対しても一定の関係を築けること。

気の合う子好きな子とだけ遊ぶのではなく、どの友だちとも等距離で遊べる力も必要。

いじめの問題→小学校に行ってからではなくもっと前からの問題。

今は、こうした人との信頼関係を築く経験が家庭や地域でもなかなかできない、育たない。保育の中でも、子どもだけに任せておくのでは育たない。保育者が手を出して、「一人の人の中にも色々な面や考え方があんだよ」と気付かせて、揺り動かし、葛藤を起こさせる。できたら壊し、揺らし、人間関係を磨いていく。

#### 4. 学びを支える「母性」をめぐって

##### ①身体から「ことば」への道ー“聴く力”とは何かー

ファンタジー さらさら

遠感覚的機能（見る、聴く） 身体を離して学習する力



ことばの力



リアリティー ねばねば

近感覚的機能（嗅ぐ、触れる、口に入れる） 身体を寄せて安定する力

##### □二つの「わかり方」

- ・くっついてひとつになって「わかる」＝身体でまるごと、自分のことのように
- ・離れて客観的に「わかる」＝言葉で分析して、頭で理屈で、人ごととして

##### □大人の役割

- ・不安定になった子どもに身体を寄せて一体化し、近感覚を通じてエネルギーを与え、子どもの心を安定させること

“心のベルトがかかって一つになる”

##### □「なぞりなぞられる関係」の大切さ

スティル・フェイス (Still Face) 実験からわかること

- ・コミュニケーションの基礎 ・後の学習（観察や模倣）の基礎
- ・心の安定の基礎＝エネルギー補給

DVD：母親の表情の変化に対する赤ちゃんの反応（母親が笑顔で話しかけると笑って反応し、喜んで喃語で答える赤ちゃん。しかし母親が急に無表情を続け、全く反応を返さないと、不安になり泣き出す）

人と人のかかっているベルト（人との基本的な信頼関係）

子どもはベルトがかかっていることを前提に生まれてくる

ベルトを外すことは虐待に等しい

□言語力は「団らん」から

団らん＝誰が話したか、誰が聴いたかがどうでもよくなるような“人と一緒にする話”  
の体験

相手の言葉を自分の身体に取り込むこと＝言葉と出会い、自分のエネルギーにしていく  
乳幼児期から義務教育時代に、どんな人とどんな言葉で繋がって自分の「お話」を育て  
たか。それを育てるのは“団らん”　ここで人の話が聴ける土台ができる。

「団らんのないところ、言語力なし」

その子どもの言語力の後ろに団らんの光景が浮かびますか？

□人の話を聴ける指導とは？

子どもは、話が面白くて興味があるから聴くのではなく、  
人と人との間にある目に見えないベルトがかかっているから。

なぞりなぞられるコミュニケーションの土台がある。

耳から入った言葉が1つになり、聴く人と話す人が「主客の一体化」

その子どもが「先生の言葉と一つになりたい」と思うこと。「大好きな先生に言いたい！」  
ベルトをかける相手になりえているか？

□人と意見を戦わせない学生たち

本気で意見を戦わせると、その人との関係がなくなってしまうと感じる。

アクティブ・ラーニングも信頼関係ができていない中では難しい。

②葛藤をどう支えるかー保護者支援も含めてー

□「子育て支援」は、なぜ必要か？

子どもがその将来にわたる健全な心身の基盤を形成するためには、乳幼児期に十分な母  
性的養育を受けることが必要。しかし現代社会の暮らしの中では母性を担う養育者（親）  
が、様々な社会的悪条件のもとで、十分にこれを発揮できない状況が生まれている。  
そこで地域社会全体で、養育者（親）が十分にその母性を発揮できるように支援する  
必要がある。

母性・・・映画「塔の上のラプンツェル」の育ての母

“安心・安全・万能、でも不自由なもの”

母性に寄っては離れ、往復運動（葛藤の始まり）の中で自分を獲得していく。

□乳児期からはじまっている 基本的信頼 VS 基本的不信

※自分が人に愛されているか、世界は自分に対して親和的なのか敵対的なのか？

自分の望みや欲する物が、そのうち手に入るのか否か？

（泣けば、呼べば外界は必ず答えてくれる、という経験）

※赤ちゃんが泣き出すとき、親の中で眠っていたテーマも動き出す

（母親が未解決のテーマや問題を抱えていたり、自身が母親から基本的信頼を得ら  
れなかった人が母になると、赤ちゃんが泣くことで自分の世界が揺れ、不安にな

る。子育て支援において、不安な母親に「こうすればいいよ」とアドバイスをするのは好ましくない。正しいことはわかっているけれどできないので、支援者をシャットアウトしてしまうか、逆に強い依存が起こったりもする。)

#### □相談（保護者支援における育児相談）の目的

正しい知識を伝えたりや望ましいアドバイスしたりすることではない！

親がたった1つしかない自分らしい方法を探すこと、親として育っていく姿勢を支援し引き出すこと。

#### ◆よい相談とは？

①「話に来てよかった！」と思いながら帰ってもらうこと。

②励ましやアドバイスが届かないのはなぜ？

→その人がそこにいることを認めている？わたしの言葉や態度はどうだったか？

③親を「役割」としてではなく「ひとりの個」として理解すること。

④そして何よりも「話してみたいあなた」であること。

※わたしたちの職業は、人間性を鍛えていくことも必要。

#### □まとめ

・主体的・対話的で深い学びの土台を育てる為の2つの柱

逞しい身体と自由な発想力 と 信頼できる関係を築き合う力

は幼児期の終わりまでに育ってほしい10この力とどうつながるのか？

この関係を5つにまとめると

意欲・・・よく食べることから

関係性・・・人への信頼感

運動・・・よく動きよく止まる身体

外界認識・・・自然環境・社会環境に心が動く

表象能力・・・「いまここ」を離れる力・持ち運ぶ力、想像力

(例えば…家に帰り、園であそんだこと楽しかったことを家族に話す力)